明日への道のり

田中勁一郎

丘の切り岸にはゼンマイやウラジロなどの羊歯類が繁茂していた。それらの隠花植物の群れを遮るように、坑口があった。僕は手にカンテラと表面は黒く錆びた兵式飯盒を下げていた。飯盒の中には母が炊いてくれた麦飯と卵焼きが入っていた。僕の職種は坑内書記だが、入坑資格者となる十八才まで、僕は坑口近くにある勤労課の用務員であった。十八才になって、僕は坑内へ配置転換になったのだった。僕と同じ年の島本も、坑外棹取を務めていたのだが、十八才になって坑内棹取に部署が変わっていた。僕がカンテラの灯を大きくして、三十度ほどの傾斜がつづく坑内へ下りかけたとき、巻堂のドラムの軋む音がして、数えて十二函数珠つなぎにされた炭車が轟音をとどろかせながら、通路の傍の線路の上を坑内へ向かって下り来た。最後の炭車の後尾は鋼鉄製の太いワイヤロープに繋がれ、僕より早く入坑した島本は物慣れた仕種で左手で炭車の端を摑み、右手には艶光りした剣鉤を下げていた。剣鉤は線路のポイントを切換えたり、繋がれている炭車を切離すときに使用するものだった。僕が坑内へ通じる階段道を一歩また一歩と、確かめるように下りていると、ニッカーズを着た島本は炭車の上から僕を一瞥して、

いまか――がんばれよな――と叫んだ。僕もすかさず、島本の首の赤いネッカチーフを見やりながら、おう――お互いになあ――叫びかえした。でも、僕の声が島本の耳にとどいたかどうか、炭車は轟然と地響きを立てながら、地底の水平地点のポイント切換え場所めざして疾走して行った。この水平地点から北の方角へ長い本線が延びていて、採炭現場へと繋がっているのであった。巻堂は坑外に二ヶ所、坑内に一ヶ所あった。巻堂には絶え間なく函下ろせ、函上げろの合図のベルが鳴り響く。その都度巻方はドラムのブレーキを緩めたり絞ったりして、巻上げ機の操作をするのであった。坑内の奥へ進むにつれて炭塵の密度が濃くなり、鉱員のどの顔も煤を浴びたように黒い。他所の鉱山では落盤、ガス爆発、発破、出水などの事故で、それぞれ多数の犠牲者を出したこともあったが、幸い僕の勤めるこの鉱山では、重大事故は一度も発生していなかった。そのために、労働基準監督署から無事故災害の優良鉱に指定されていた。そのことを僕は誇りに思っていたのだった。この鉱山の勤務体制は一番方が午前六時から午後二時まで、二番方が午後二時から午後十時まで、三番方が午後十時から翌朝の午前六時までとなっていた。僕は非番のとき、気晴らしに市街へ行くことがあった。市街へ出るには徒歩で野を越え、山を越え、谿を越えてバスの通る国道へ出なければならなかった。僕の勤める鉱山は、辺鄙なところに存在していたのだった。ある日僕が国道まで歩いてバス停に佇んでいると、大型トラックが鉄管を満載して次々に通過して行くのを目にした。消防車もサイレンを鳴らして何台か通過した。いったい、何事なのか……僕は過ぎ去る車の後姿を見やったが、真相は杳としてつかめなかった。僕が近くにある鉱山の出水事故を知ったのは、市街へ着いてからだった。その後数日経ったが、懸命な救助活動もむなしく、坑内にあふれる水を排出できず、坑内にいた三十三名をそのままにして、鉱山は閉山のやむなきに至ったのであった。僕の脳裏に、このことが焼きついていて、いまでも離れないのだった。僕は幸せだな、無事故無災害の優良鉱に勤めることができて……僕がそう思うゆえんはそこにあった。

水平地点に着いた空炭車は、坑内本線の棹取の手に委ねられ、島本は石炭を満載した炭車の最後尾の端に乗り、十二函の炭車は坑外へ向けぐんぐん巻上げられて行く。階段道の端はすべり止めが木枠で支えられているのだった。僕は炭車が上り過ぎてから、後をふりかえって見た。後から一番方の鉱員が続々と傾斜道を下りて来る。ガスが発生しない鉱山だから、坑帽灯のない鉱員帽を被り、手にカンテラを下げている。坑内の壁のあたりに裸電線が張り巡らされ、十メートルほどの間隔で裸電球がぶら下がってはいるが、坑内は薄暗い。携えているカンテラは愛着を覚えるほどの強い味方であった。僕はこのことにも誇りを感じた。

口笛を吹きたい心境だった。僕は思い切り口笛を吹いた。

祁山悲秋の風更けて

陣雲暗し五丈原

喉をついて、星落秋風五丈原の歌曲が坑内に響きわたる。僕は有頂天になっていた。「坑内で、口笛を吹いちゃいかん」後から、戒めの声が響いた。

「……？」僕は後をふりかえり、呆然と階段道に突っ立っていた。

「坑内で口笛を吹けば、硬かぶるという謂れがある。うちは優良鉱だぞ、事故があってはならんのじゃ」

「はい……」僕は二の句が継げなく、素直に肯いた。僕は少年であった。いつ発生するかわからない落盤事故のことなど、絵に描いた餅のようで、現実として受止めるには落差があった。僕が歩かなければ、後の鉱員が前に進むことができない。

「すみません」僕は戒めてくれた鉱員に詫びて、ふたたび歩き出した。水平地点に到達すると坑内本線棹取の藤山さんが、きらりと光る剣鉤を二本の裸電線に水平にあてがい、坑内巻堂に向け合図を送っていた。剣鉤の握りにはゴムが巻かれていて、感電しないのだった。巻堂にりんりんと函下ろせの合図のベルが鳴り響くと、藤山さんは最後尾の炭車の端を左手で？んで、かなり遠くの採炭現場へと、本線を下りて行った。僕は坑内に炭車がいないことを確認して、線路を跨ぎ、坑内本線のほぼ中央部にある採鉱課の詰所へ向かって、傾斜のつよい階段道を歩いた。採鉱課は坑道の壁の硬層を抉り取って作られていた。中には七名の職員と書記が坐れるほどの面積があり、奥に一人で作業できる倉庫があった。

「おはようございます」採鉱課の中に入った僕は、朝の挨拶をした。採鉱課長の隣りの椅子にかけている主任の葛田さん始め、三名の係員と書記の田津さん、すべてが、

「おはよう……」と応えてくれた。彼らは三番方なので、一番方が出勤して揃うと、退鉱するのであった。三番方の係員の三名はまだ切羽（採掘場）にいるのか、姿は見えなかった。一番方の鉱員は勤労課から捺印してもらった入坑伝票を、僕のいる書記席の窓口にある木箱の中へ投げ入れて行く。そうこうしているうちに、一番方の係員がそろい、三番方の係員と書記の田津さんが、

「じゃぁ、これで上がります。後をよろしく」と声をかけて退鉱して行った。僕は書記の職務である鉱員の入坑伝票の整理にとりかかった。鉱員の職種は掘進、採炭、充填、仕繰、ポンプ、車道大工、それに棹取がある。経験年数の長い人を先山と呼び、比較的短い人を後山と呼んでいた。僕は入坑伝票をもとに、入坑者控と墨書してあるノートに職種ごとに入坑者名を記入して行った。僕が一心不乱の状態でペンを走らせていると、

「やあ、ご苦労さん」線路が見とおせる窓口へ声をかける人たちの姿があった。坑内測量士の大堀さんと測量士補の山内さんであった。

「ご苦労さまです」僕はそういって応えた。大堀さんは三脚を手に持ち、肩に白くて大きい雑嚢をかけていた。山内さんも大きい雑嚢を肩にかけ、右手にポールを持っていた。雑嚢の中には、測量器械のトランシットや水準儀などが詰まっているのだなと、僕は思った。書記といえば聞えはよいが、用務員のような職務であった。そのため僕は右三方払や左二方払（採炭現場）などの他、本線の終点の掘進現場へ伝令として赴くことが多々あった。そんなとき、測量中の二人に出くわすことがよくあった。二人は僕の姿を認めると、測量を一時中断して、親しく語りかけてくれるのだった。だから僕は、彼らに好意を抱いているのであった。窓口の上方に、鉱員名が墨書された木札がぶら下がっていた。欠勤者の木札は僕が裏返すのであったが、裏返すと、木札の氏名は朱文字にかわる。

「北山と岡田は、今日もノソンか」奥の採鉱課長の席から木札を見た楠山さんの声がした。一番方係員の最高責任者の楠山さんは、口喧しい人で、そのせいか鉱員らは陰で糞山と呼んで、彼を罵っていたのだった。鉱員らが罵る声を、僕は用務で切羽に行って聞いたことがある。坑内では第三国生まれの人や荒くれ者も就労している。職員の最高責任者が鉱員から言いくるめられるような大人しい人では勤まらないのだと僕は思った。坑外の勤労課には、柔道三段の猛者を職員として据えているのだから。

「欠勤しています」僕は応えて起ち上がり、電気コンロに掛けていた湯が沸いたのでそれを茶出しに入れかえ、茶の葉を入れて楠山さんの湯のみと、採鉱係員の湯のみに注いでやる。

「独身者はノソンが多くて、困りますね」採鉱係員の一人がそういった。彼らの机の上にはダイナマイトが山をなしていた。ダイナマイトには雷管のついた導火線が差し込まれていた。

「奴らは、ノソンしたうえに、ドマグレるから困りものだ」

楠山さんが湯茶を飲みながら嘆きの言葉を吐いた。ノソンとはずる休みのことだろう。ドマグレとは自暴自棄のことで、その他この鉱山では入坑して長く続かず辞める人のことをケツワルといっていた。僕は当初、この言葉の意味を理解できなかったのだが、いまでは朧気ながら理解できるのだった。課長の楠山さんもだが、主任の葛田さん、それに係長の森さん……この人たちの顔は鬼瓦を潰したような顔だった。長い歳月、気性の激しい鉱山の男たち相手の職務遂行で、このような

顔になったのだろうと僕には思えた。採鉱係員は右一方払から左三方払まで、六名いる。彼らのことを鉱員らは、ヤンバンと呼んでいた。湯茶を飲み終えた係員は、担当箇所の切羽の話をしながら、白くて大きな雑嚢にダイナマイトを数えて入れ込んでいた。ダイナマイトは掘進夫の発破作業に用いるのである。鉱員の入坑伝票の整理とノート筆記を終えた僕は、課長のところへ行き、それを見せて捺印してもらった。

「ところでおまえ、企画課の大堀さんのところへ、これ持って行ってくれ」

楠山さんが険しい目つきでそういった。採鉱係員はダイナマイト入りの雑嚢を肩にかけ、一人去り、二人去りして、採鉱課から出て行った。

「はい……」僕は楠山さんの手から、書類を受取った。

「行ってまいります」

僕は採鉱課を出て、かなり傾斜のある階段道を歩いた。坑口から坑内道を計って、二〇〇メートルほどの距離だった。線路の終点まで、これから一〇〇メートルほどの距離がある。大堀さんらは稀に切羽にいることもあったが、本線の掘進夫が削岩機で掘削している本線の終点にいることが殆どだった。だから僕は、そこをめざして歩いた。歩くにしたがって、階段道の傾斜もおもむろに緩やかになって行く。本線の坑道は大きく抉られているため、背筋をのばして優に歩ける。でも、右一方払や左三方払などの切羽に通じる支線の場合はそうは行かない。炭車がやっと通れるほどで、縦幅も横幅も狭い。しばらく歩くと、線路の左側にポンプ方が勤務する詰所があった。排水ポンプの唸る音が、とても煩く耳に響いた。坑内に湧き出る地下水を、坑外へと排出しているのだった。突然、後方に轟音がして、数珠つなぎの空炭車が下りて来た。棹取りの藤山さんが、左二方払へ通じる支線の手前で躍び下り、巻堂へ合図を送る。空炭車は支線の手前で停止する。藤山さんは剣鉤を器用に使いこなし、ポイントを切換えてふたたび合図を送る。空炭車が緩やかに左二方払へ向かって動いて行く。藤山さんは鋼線の太いワイヤロープに繋がれている空炭車の鉤の連結ピンを剣鉤で抜き、石炭を満載した十二函の炭車にワイヤロープを連結する。藤山さんが合図を送ると、じわじわと炭車が上り始める。僕はふたたび歩いた。洞窟のような坑内の天井は、仕繰夫たちが五〇センチほどの間隔で松の木の丸太の桁を組み、それを丸太で頑丈に支えているため、落盤の危険率はきわめて低かった。立ち止まって四周に目を配ると、丸太の間のぶ厚い硬層の中に貝殻の化石がまじっていることに僕は気づいた。太古の昔、地殻変動が起きる前まで、ここは海岸だったのだろうか？僕はそう思った。また歩き出すと、本線の終点に到達した。やはり大堀さんと山内さんはここにいたのだった。掘進夫は右二方払や左三方払などの支線にいるらしく、姿は見えなかった。山内さんは本線坑道の終点の硬層の壁に、ポールを持って突っ立ち、大堀さんがポールに向かって三脚の上に据えられているトランシットを覗いていた。

「ご苦労さまです。課長がこれを……」僕は大堀さんの背後に声をかけた。山内さんはポールを手にしたまま無言だったので、大堀さんは驚いたように後をふり向いた。

「ああ、君か……ご苦労さん」大堀さんは僕の労を犒い、課長からの書類を受取った。

「測量して、図面を描くのですか」

「そうだよ。横断面図や縦断面図の他に、いまある実際の図面に、現在石炭がどれぐらい採掘されているか、実測を基準にチェックして行くんだ」

「ほねの折れるお仕事ですね」

「そうだよ。間違えば大変なことになるからね。でも、やり甲斐のある職務だよ」

大堀さんはそう応えた。突っ立っていた山内さんは硬壁にポールをもたせかけ、僕らの方へ近づいて来た。僕はこれで採鉱課へ戻ろうと思った。責務をはたしたのだから……。僕の様子を覚ったのか、大堀さんが、

「そう慌てて採鉱課に戻ることもないだろう。しばらく、ここで休憩して行くといい」

大堀さんがそういうと、山内さんがたたみかけるように、

「どうだ、少しは坑内の空気に慣れたかい？」と訊ねた。僕は少年であった。少しばかり含羞みながら、、優しい山内さんの言葉に、

「皆さんのお陰で、どうにか慣れることができました」と応えた。採鉱課長の厳しい顔が心に浮かんだ。――あいつ、どこで油を売っているんだ！そんな声が脳裏に響いた。――少年の足でも、少しぐらい遅くなることだってあるさ。僕は心でそう応えて、もう少しだけ彼らと語り合うことにした。

「Boys,be ambitious……少年よ、大志をいだけ……この言葉の意味が、君はわかるかい」大堀さんが柔和に笑って、僕を激励してくれた。傍の山内さんも優しい笑みを湛えていた。

「有名な、クラーク博士の言葉ですね」

「少年は希望をすてちゃいかんのだ。少年老いやすく、学なり難し……という言葉すらある。暗い坑内で働くからといって、

決して希望をすてちゃいかんのだよ」大堀さんは僕に懇々と諭すように、そういった。
「僕は坑内で働いて学資金を蓄え、その時が到来したら、勉学に励むつもりです」
「えらいぞ……」
「その意気で、がんばるんだぞ……」彼らは僕をせいいっぱい激励してくれた。ここは坑内の最深部である。炭塵が舞い、熱気でむんむんしている。彼らもだが、入坑者のすべてが膚に脚絆をつけていた。僕はいま佇んでいる頭上の坑外はどの辺りだろうと想像してみた。あの辺りには田圃があり、近くには小川が流れ、鶺鴒すらいる。竹藪もある。野には草花が咲き、ほおじろもいる。きっと、あの辺りだろうと思った。
　手にカンテラを下げ、僕は二人に別れてふたたび階段道を上った。途中で、轟音とともに空炭車が線路を下りて来るのに出交したので、僕は佇んでそれを見送った。むせかえるような炭塵のせいか、炭車も、棹取の藤山さんの姿も、線路も、硬壁も、僕の目に映るものすべてが、薄黒く見えるのだった。採鉱課に戻ると、いちばん奥の課長の席で楠山さんは執務していた。時おり、係員が所用のために姿を現わすことがあったが、その姿もなく詰所には課長一人が椅子に掛けていた。
「ただいま、戻りました」僕は怖ず怖ず課長に声をかけた。えらい遅いじゃないか……と小言をいわれるのではないかと怖れたのだったが、
「やあ、ご苦労さん……」課長は僕の顔を一瞥して、すぐさま執務をつづけた。案に相違して、課長の顔が優しく、予想が外れて、僕はほっとして思わず胸をなで下ろした。僕は書記席に着いた。窓口から眼前の炭車の線路を見やると、線路の真中にほぼ十メートル間隔で安全車が横向きに据付けられているのが目に映った。これは炭車を繋いで昇降する鋼線の太いワイヤロープの滑りをよくするもので、昇降をくりかえすために磨耗して黒ずんでいた。しばらくすると、一人の鉱員の姿が窓口にあった。
「伝票、書いてくれないか」この鉱員がどこの切羽に所属しているのか、まだそこまでは目が肥えていない僕だった。鉱員のすべてが、生きるために懸命に努力しているのだと僕は思った。
「はい、わかりました」快く応えて、資材請求伝票に鉱員の求める資材名と部署、氏名、年月日を記入することにした。
「鶴嘴、雁爪、それに掻板と竹笊を、おのおの一個ずつお願いするよ」鉱員の顔も衣服も炭塵で黒く汚れていた。手にしているカンテラの焔のみが、明るく輝いていた。僕は鉱員から聞いたとおりの資材名その他を伝票に記入して、それを課長のところへ持って行った。課長の決裁をあおぐためだった。資材は鉱員が必要にかられて求めるものである。個人的に使用するのではなく、石炭を採掘するために求めるものだった。
「うむ……」課長は執務中の書類から目を離し、差し出した伝票を見た。課長はすぐさま捺印してくれた。僕はふたたびその伝票を手にして書記席へ戻り、窓口の傍に佇んでいる鉱員へ手渡した。
「ありがとう。世話をかけたな」鉱員は僕に礼を述べ、坑外へ向かって階段道を上って行った。資材課は坑口の傍に建っている勤労課から北へ一五〇メートルほどのところにある鉱山事務所の中にあった。勤労課だけが職務の遂行上、やむなく坑口付近に陣取り、他の庶務や企画、会計などの課はこの事務所の中に存在しているのだった。したがって、資材請求伝票を手にした鉱員は資材課に伝票を提出するのであった。伝票を受けた資材課係員は、伝票に書かれた資材を空炭車で要求した部署へ送り届けるのだった。僕が窓口から真向かいの線路の側の硬壁に目をやる間もないほど、ひっきりなしに炭車が昇降する。上りは鋼線の太いワイヤロープに引きずられ、石炭を満載した十二函の炭車が、ぐんぐんぐんぐんといかにも重苦しいような音を響かせながら、僕の眼前を通過する。下りはごおごおごおごおと、さも軽いぞといわんばかりの空炭車が通過する。上り下りとも、最後尾の炭車の端に乗っている棹取の藤山さんの姿がとても印象的だった。
「ご苦労だが、右三方払に行ってくれんか」奥から課長の声がした。
「はい……」僕は快く応えて起ち上がり、課長席へ向かった。二度めの伝令の職務だった。
「これを、谷山さんに渡してくれ」課長は書類入りの封筒を僕に手渡した。
「行ってまいります」僕はカンテラを手に、ふたたび階段道を下りた。北の方角へ本線が延びているのだから、右三方払は東の方角ということになる。谷山さんは右三方払の係員だった。この箇所は大堀さんら測量士のいる本線の終点に近い採掘場でもあった。僕が右三方払の支線へ近づくと、棹取の藤山さんが巻上げろの合図を巻堂に送り、数珠つなぎにされた十二函の炭車を巻上げるところだった。鉱員たちがドマグレと呼ぶ炭車の脱線事故は主に空炭車を支線に誘導するときに起きやすい。藤山さんは僕の姿を認めると、
「やあ――」と声をかけ、線路のポイントを元のように切換え、石炭を満載した最後尾の炭車の端に躍び乗った。藤山さんも棹取なのでニッカーズを着ていたが、島本のようにネッカチーフを首に巻いたりはしていなかった。長地下足袋を履いているのは島本と変わりなかった。じわじわと巻上げられ、十二函の炭車が本線の線路上に乗移ったころには、巻上げる速度もおもむろに速くなって行った。僕は背を丸めて天井が低くて横幅の狭い右三方払の坑道を奥へ向かって歩いた。天井のと

ころどころに裸電球は光ってはいたが、大きな真鍮製の照らしをつけた僕のカンテラの灯の方が煌々と光り輝いていた。石炭を満載した炭車が数台と、その合間に硬を満載した炭車が数台、木の扉の手前の線路上に押し出されていた。扉から先には入気坑と排気坑があり、切羽へ向けて坑外から入気坑を通って新鮮な空気が流れて来る。新鮮な空気が縦横幅のある本坑道へ流失しないように、木の扉が設えられているのだった。扉のずっと奥の切羽に、ヤンバンと怖れられまた尊敬もされている採鉱係員の谷山さんの姿があった。狭苦しい坑道には空炭車が数台あり、後山と呼ばれる採炭夫がスコップで掻きよせられた石炭を積んでいた。彼らのカンテラは天井の硬を支えている桁柱の針金に吊してあった。線路の終点には掘進夫がいて、ダイナマイトを仕掛ける孔を穿けていた。

「課長から、これを……」僕は課長から言付かった書類入り封筒を谷山さんに手渡した。

「ありがとう、ご苦労さん」谷山さんはそういって、僕を労わってくれた。用事がなければ、滅多に来ることのない切羽である。僕は向学のために、しばらく採掘場を見学してから採鉱課へ戻ろうと思った。大堀さんのときのように、課長の険しい赤ら顔が脳裏を過ぎったが、幸いなことに谷山さんは見て見ぬふりをしていたので、僕は高をくくったのだった。

「帰りに、これを詰所まで持って行ってくれ」谷山さんが手渡したのは、硬の中の化石だった。その化石はアンモン貝のように渦を巻いた珍しいものだった。

「子供さんたち、きっと喜ぶことでしょうね」

「おれ、子供の喜ぶ姿を見るのが生き甲斐なんだよ」

「わかります」僕はそう応えて北の方角にあたる切羽を見つめた。切羽は一メートルに満たない硬と硬の間にある石炭層を、先山の採炭夫が短か柄の鶴嘴を握り、横這いになって懸命に掘っていた。天井の硬層の罅割れに、矢板を打ち込む採炭夫もいた。掘り崩され、炭塵の舞う石炭を後山の採炭夫が雁爪や掻板で空炭車の待つ坑道へと掻き寄せる。そうしてまとまった石炭の山を、炭車へと積込む。地圧の響きが聞える中で、採掘されすっかり空洞になった硬と硬の間を落盤防止のため充填夫が丸太を横に寝せ、井の字形につみ重ねて行くのであった。そこには滲み出る汗を拭こうともしないで就労する尊い人間の姿があった。僕はしばらく佇んで切羽の情況を見やった後、ふたたび階段道を上って採鉱課へ戻った。書記の坐る窓口の傍の通路を通りぬけ、詰所の扉を開けると、こんどは僕の姿を認めた課長の方から、

「やあ、ご苦労さんご苦労さん」重ね言葉で労を犒い、板壁に掛けてある柱時計に目をやり、

「もうぼつぼつ、ダイナマイト担ぎの時間じゃないのか」といった。

「はい、これから、出かけましょう」

「ついでに、鉱員住宅に寄って、ノソンしている北山と岡田のところを覗いてくれんか。ノソンした理由を聞き質してくれ」

「はい、わかりました」僕は素直に返事をした。書記にとって、一番方のダイナマイト担ぎと、二番方の導火線に雷管を取付け、それをダイナマイトに差し込む作業は、最大の職務であった。僕が、

「じゃぁ、事務所へ出かけます」そういって詰所の扉を開けようとすると、

「ダイナマイト、気をつけてな」課長が気遣ってくれた。僕はカンテラを下げ、詰所を出て坑口へ向かった。

2

僕は上るにしたがって傾斜が険しくなる階段道を、六根清浄、六根清浄と心でくりかえし唱えながら上った。やがて薄暗い坑内の上部に、ぽっかり穴を開けた坑道への出入り口が見えてきた。僕はカンテラの灯を少しだけ絞り、小さくする。坑外へ出ると、地下にいる？が誤って地上へ姿を現わしたときのような感じで、陽光がとても眩しかった。坑外には巻堂のある平坦地にポイント切換えの線路が巻堂から東南の方角へ数列ならび、石炭を満載した炭車が十二函、線路の上に止まっていた。石炭を満載した炭車の上に、勤労課に所属する検炭係員が木札を乗せていた。途中で石炭を横流しする不届き者はいないだろうに、と僕は思ったが、これにもなにか深い謂れがあるのだろうと打ち消した。石炭を満載した炭車の横の線路には、空炭車が二十四函止まり、若い坑外女性鉱員が二人で炭車の車軸に油を差していた。東寄りの線路の側に棹取小屋と鍛冶小屋があり、鍛冶小屋では職工と見習いが鉱員の使った鶴嘴や雁爪などの磨耗した箇所を延ばしたりしていた。棹取小屋と鍛冶小屋の少し上の高台には勤労課があり、窓から巻堂の傍の平坦地を一望できるのであった。坑外専用の巻堂は東の方角の一〇〇メートルほどの高台にあり、勤労課の横の坑口寄りのところから線路が敷かれ、巻堂の二十メートルほど手前に自動車道路があるため、そこは高架線路となっていた。巻堂のすぐ傍に選炭場があり、坑外夫が数人いて、巻上げられて来た炭車の函を開き、選炭場に向け石炭を下ろして函を空にしていた。下ろされた石炭は選炭婦たちの手によって石炭と硬に選り分けられ、石炭は鋼鉄製の大きな金網式ポケットに流し込まれる。ポケットがいっぱいになると、待ちかまえていた大型トラックに積み込まれ、ここからおよそ二キロほどのところにある港まで搬送されるのだった。港には貨物船が待ちかま

えていた。僕が検炭係員の方へ目をやると、検炭が終わったのか、傍に佇んでいた棹取が高台の巻堂へ合図を送っていた。この棹取は坑内棹取のように剣鉤を二本の裸電線に密着させるようなことをせず、ちゃんと規定どおり垂れ下がっているアンモナイト状の二個の合図線を密着させていた。坑外の平坦地の石炭を満載した炭車がおもむろに高台へ向けて巻上げられて行く。棹取は最後尾の炭車に躍び乗り、島本のように、首に巻いたネッカチーフを風に靡かせていた。島本とちがうのは、この棹取のネッカチーフは紫色であった。僕がダイナマイトを受取りに行く鉱山事務所の方から電線が張られ、一定間隔で電柱に支えられていた。見上げると、烏が二羽止まっていた。しばらく歩くと、若い女性が二人、路傍の硬の上に腰を下ろして日向ぼっこをしながら流行歌を唄っていた。僕は彼女らに軽く会釈したのであったが、彼女らは会釈をかえすこともなく。僕に流し目を送りながら唄いつづけていた。向学心に燃えている僕にとって、この歌はあまりにも通俗的であった。

――いけない、僕はまだ少年の身分である。家には病弱な父がいて、腺病質の母がいる。両親ともあまり過激な労働はできないのだ。異性に心奪われては燃えたぎる向学心が音たてて崩れる危険性もある。くわばらくわばら……僕は心でまじないを唱えながら、自問自答していた。僕は心のうちのジレンマを追払うために、口笛を吹こうと思った。ここは坑外である。誰はばかることなく口笛が吹けるのだった。

清渭の流れ水やせて
むせぶ非情の秋の声

僕は星落秋風五丈原の歌曲を思い切り吹いた。この歌曲を吹くと、心の奥底から希望がわいて来るような気がしてならなかった。電線に止まっている烏も、硬の傍にいる雀も、その他もろもろの生きとし生ける物のすべてが、僕の目に、生き生きとして生気に満ち溢れているように映るのだった。人々が硬端と呼んでいる硬の広場はまだ続いていた。硬端には巻堂の傍から線路が敷かれ、坑内から炭車で運ばれた硬をこの場所に廃棄していたのだった。それが積もり積もって、いつの間にか大広場になっていたのだった。鉱山事務所に通じる道路は、この広場の傍を通っていた。硬端の広場では、鉱職員合同の運動会や相撲などの慰安行事が催されることがあった。この広場の終点から八十メートルほど歩けば鉱山事務所が建っている。鉱員住宅は硬端から見えていた。硬端の広場の中ほどから人の通れる径ができていて、途中の沢を渡れば、棚段の状態で傾斜地の中に鉱員住宅が建ちならんでいた。向かって左上方に人々がクラブと呼んでいる劇場が聳えている。この劇場では映画が上映され、浪曲、戯曲などが上演されることがあった。かつて、僕がまだ小さい国民学校の一年生のときに、このクラブに潜水艦の乗組員の水兵さんたちが駐留していた。石炭を積出している港に、潜水艦三隻が海に潜ることなく停泊していたのだった。機関の故障でそうしていたのか僕は知る由もなかったが、米国のB二十九爆撃機やグラマン戦闘機の飛び交う間を縫って、国民学校の広場で水兵さんたちが颯爽とした姿で海軍体操を披露してくれたことを僕はいまだに忘れることはできない。終戦になっても三年ほどの間、その潜水艦は港に浮いたままの状態で放置されていたので、鉱員の家庭の子供たちが泳いで潜水艦にたどり着き、釣り糸を垂らしていた。鉱員の家庭の子供たちは飢えてはいたが、とても勇敢だったと僕は思う。沢を渡ると、鉱員浴場があった。鉱員らはこの浴場で体に付着している炭塵や汗を洗い流し、疲れをいやすのであった。僕も退坑時にはこの浴場で入浴する。第三国生まれの鉱員も、日本国生まれの鉱員も、同じ鉱山の仲間である。同じ浴槽に浸り、疲れをいやす。鉱員にとって、この上ない喜びを感じるひとときであった。鉱員住宅めざして歩を進めると、住宅近くの余地で老女がガラの製造をしていた。ガラは石炭の粉を水で錬り、それを天日で乾かして作る燃料だった。これを鉱員の各家庭に分配して、炊事用の燃料として鉱山側が使用させていたのだった。

「こんにちは、精が出ますね」僕は逞しい声で、黒く汚れた長靴で一心に石炭の粉を捏ねている老女に声をかけた。老女は驚いたような眼差しで僕を見て、

「あら、お使いに?」といった。手にしている掻板も手袋も、濡れた石炭の粉が付いて真っ黒だった。

「はい……」僕はそう応えてから、思い出したように訊ねた。

「北山さんのお宅と岡田さんのお宅、わかりますか?」鉱員住宅はこの地の他に、東の方角に一キロほど、山道を歩いた麓の傾斜地にもあった。でも、僕は採炭夫の北山さんと岡田さんはこの住宅に住んでいることを薄々覚ってはいたのだったが。

「ほとんどの住宅に、表札をかかげてあるから、それを頼りに行くとわかるわよ。お二人とも、ノソンしとるの?」

ええ……まあ……」僕は老女に曖昧に応えておいて、鉱員住宅に向けて歩を進めた。鉱員住宅は四世帯入り長屋であった。住宅の側のところどころに、共同井戸と便所が設えてあり、これらの屋根はトタン葺きで、すでに老朽して穴が開いたりしていた。僕は表札を頼りに北山、岡田さん宅を探した。住宅の庭一面に粉炭がまかれ、それを踏みつけるので黒く丈夫な庭であった。鉱員住宅の玄関の傍には蘭やチューリップなどの鉢が飾られ、人間生活のひとこまを物語っていた。鉱員住宅の両側は疎林で、小綬鶏の鳴き声が聞えた。やはりガラ製造の老女がいったとおり、どの家庭も玄関の扉の上方に、表札をかかげていたので、目あての住居を探すのに苦労はしなかった。北山さんの住居は下から数えて三段めの長屋だった。上り歩

いて三段めの左側のいちばん端が北山さん宅だった。僕は表札を確かめ、心の裡でこれも職務といい聞かせ、怖れることなく声をかけた。

「北山さ――ん、ご在宅でしょうか――。採鉱課の使いの者で――す」と叫んだ。しばらくして、中から反応があった。扉が無言のまま開かれたのだった。

「なに……？」北山さんが酒臭い息を僕に吐きかけた。僕はためらうことなく、

「課長がですね、欠勤された理由をお訊きするようにと……」採鉱課長の伝言を北山さんに告げた。

「そういうことだったのか……」僕の訪問の理由を覚った北山さんは、

「そうだなあ……」俯いて、しばらく思案にくれていたが、ようやく意を決して、

「腹いたみ、と伝えてくれよ」そういった。いった後、心が晴れたのか柔和な笑みを湛えていた。岡田さん宅は、北山さん宅から二段うえの棟だった。岡田さんの場合も、彼とまったく同じ様相だった。飲酒している姿になんら変わりはなかった。違うのは岡田さんの場合は腹痛でなく、カゼ具合がわるいという理由で欠勤したということだった。二人とも、奥さんと死別していると僕は聞いていた。独り居の寂しさに堪えられない日があるのだろうと僕は思った。でも、僕は職務を忠実に遂行しなければならない。北山さんが腹痛で、岡田さんがカゼひきという理由で欠勤したことを、課長に伝えなければと思った。それから僕は、鉱山事務所へ向かった。事務所の中に入ると、右側の日付入り黒板に坑内安全週間と書いてあるのが目についた。ダイナマイト受領の申込と受渡しは庶務課であった。僕は事務所のいちばん手前にある庶務課に、採鉱課長から捺印してもらったダイナマイト受領申込伝票を提出した。僕の顔を覚えたのか、係員が僕を事務所の外にある爆薬保管倉庫へいざなってくれた。ダイナマイトは茶色の油紙に包まれ、ソーセージ状になっている。それが木箱に二〇〇本、ぎっしり詰まっているのだった。

「大丈夫かい？」係員は倉庫をカギで開け、保管されている木箱の一つを僕の肩に担がせてくれた。木箱の外側には、朱文字でダイナマイトと刷ってある。

「もう、慣れましたから」僕は心にもないことをいって微笑みながら、鉱山事務所を後にした。僕が坑外にある勤労課から坑内の採鉱課へ配置転換された当初は、とても不安であった。万が一、傾斜の険しい坑内の階段道ですべって転んだら、肩に担いでいるニトログリセリンはいったいどうなるのであろうか。大爆発を起こして、僕の体はこっぱみじんに砕け、あたり一面に飛び散るのではあるまいか……？そのような恐怖感に苛まれていたのだった。それで僕は採鉱課主任の葛田さんに恐々たずねてみた。葛田さんは髭を生やした肌色の黒い人だった。彼のことを、鉱員らは陰で糞田と罵ったりしていた。

「おまえ、なにも知らんのだな。ダイナマイトは誘爆装置がなければ、爆発しない。すべったり転んだりして、木箱を放り投げても、誘爆するもんじゃないぜ。安心しなよ」

葛田さんはそういって笑った。それ以来、僕のダイナマイトに対する恐怖感はいくぶん和らいだのであったが、でも、心の裡から完全に消滅したわけではなかった。だが、過激な労働のできない父母のことや、向学心に燃えている僕自身のことを思うと、木箱に詰まっている二〇〇本入りのダイナマイトの重みなど、さほど苦にはならなかった。書記の職務は僕と大里さんだけが一番方と二番方を交代していて、田津さんが常時三番方だった。だから、大里さんが一番方のときは、当然ダイナマイト入りの木箱を担ぐ。大里さんだって、僕と同じ心境で木箱を担いでいるのではないかと僕は思った。ふたたび硬端へ差しかかった。ただ漠然と木箱を担いで歩いていると、どうにもやりきれない思いがした。すると……昨年秋に、この広場で催された鉱山運動会の模様が、ありありと脳裏にえがき出されていた。運動会は鉱職員仲間どうしの対抗であった。僕がこの広場へ行くと、もうすでに黒山の人だかりがしていて、その中には棹取の島本の姿もあれば、採鉱課長の楠山さんや企画課の大堀さんと山内さんの姿も目についた。また、先輩の掘進夫の秋山、それに後輩の選炭婦の松原勝子と炭車の車軸に油を差している徳永喜代子の姿も僕の目に映った。彼らは、この鉱山から一歩も外へ出ることもなく、親代々の鉱員としてこの鉱山で就労して、この鉱山に骨を埋める覚悟をしているのであった。午前九時、予定どおり運動会は開催された。まず最初に、開会式が行われ、会長が挨拶する。会長は鉱長の佐田さんだった。烏合の衆は静かに会長の言葉に耳を傾けていた。会長の挨拶が終ると、一〇〇メートル徒歩競走だった。十代から四十代まで、年齢に制限なく参加することができる。僕は走る方に自信がなかったので、応援する方にまわったが、駿足の島本や藤山さん、それに企画課の大堀さんと山内さんらはスタートラインに並んでいた。勝子の父親の絹男さんの姿もあった。この人はキンさんという呼名で親しまれていた。彼は四十代だが、旺盛な体力で毎年三着までの入賞圏内に入っていたのだった。キンさんは鉱員らしく黒い鉱員帽を被っていたが、ランニングシャツの下は褌姿だった。でも、ここは寂寥感さえ覚える僻地の硬端であった。他人の服装など、どうでもよいことであった。スタートラインに並んだ第一組は総勢八名で、足を延ばしたり押さえたりして余念がなかった。

「位置について――」進行係員が叫んだ。係員の声に急かされて、八名が石灰で引いてある定位置についた。

「島本がんばれよ――大堀さんも、山内さんも、がんばって下さ――い」僕が叫ぶと、島本も、大堀さんも、山内さんも、

掌を上げて応えてくれた。彼らは烏合の衆に見つめられて、心なしか緊張しているように見えた。
「用意……」係員は体育用模造拳銃を空に向けた。スタートラインの七名は前屈みの体勢で左足を二歩手前に引いていたが、島本だけが前屈みの体勢ながら両指を地面に密着させていた。係員は心で秒読みしているようであった。やがて、拳銃がパンと轟音を鳴らした。八名の走者が、いっせいにスタートラインを躍び出し、ゴールへ向かって一目散に疾走した。応援の声も色とりどりだった。
「キンさ――ん、がんばって――」と叫ぶ黄色い声が、際立って僕の耳に響いた。その声に励まされた三位の絹男さんは、二位で疾走している島本のランニングシャツを引張り、二位に割り込んで行った。彼の褌はいつの間にか横にずれていたが、懸命に疾走している絹男さんはなにも気づいてはいなかった。
「キンさ――ん」烏合の衆はそんな絹男さんに声援を送りつづけていた。この広場には警官など来ないのだから、烏合の衆は抱腹絶倒したが、明日の英気がやしなえてよかったと思っているようであった。けっきょく、絹男さんはゴールまで横にずれた自分の褌に気づくことなく、二着に入った。その他、種目はたくさんあったが、このときの一〇〇メートル徒歩競走は僕の心の奥深く、いつまでも印象に残っているのであった。運動会が終ったあと、僕たち鉱山労働者の若者で結成している青年団はクラブで戯曲を上演するため、東山の鉱員住宅に集った。そのころまで、僕は勤労課につとめていたので、交代制でなく僕だけが午前八時から午後五時までの平常勤務であった。それで夜間の練習には余裕をもって行けたのだった。
「すばらしい演芸会になるでしょうよ、きっと。炭鉱の青年さんに、こんなりっぱな芸ができたのかと、クラブの観客はどよめくことでしょう」喜代子の母は年に似合わぬ厚化粧をして、興奮している様子だった。座長を自ら買って出た母の目は光っていた。
「とにかく、時代ものやろうよ」島本は剣鉤でなく、模造刀を振りまわしたい様子であった。
「もちろんよ。現代ものより、時代もの……それも股旅ものの方が、観客の受けがいいからね」母は応接台を囲んでいる若い鉱員たちに湯茶を注いでくれた。
「台本は、誰が書くの?」そう訊ねたのは測量士の大堀さんだった。大堀さんも平常勤務だから、参加できたのだった。
「名月赤城山、瞼の母、その他、いろいろあるじゃないの」山内さんは浪曲ファンなのか、浪曲で覚えたような題名を口にしていた。徳永母子は日本舞踊歴があるので、舞台に立ってもどうということはない筈だが、他の若い鉱員はすべてが新人ばかりなのであった。だから、はたして成功するのかどうか、誰もが不安そうな顔つきをしていた。
「台本のこと、座長さんにお願いしようかな」僕がそういうと、すべての鉱職員が賛成してくれたのだった。
「うまく書けるかどうか、みながそういうんだったら、新しい股旅もの、書いてみるわね。次の集合時までに、台本が読めるよう創作して、ガリ版刷りにしておくから」
母は上機嫌だった。僕の胸もときめいていた。ここに集合している若者はすべてが鉱山の仲間であった。職員もいれば、坑外夫、坑内夫もいるのだった。硬と石炭を選りわける選炭婦も加わっていた。すべてが炭塵にまみれて就労している若者たちであった。二度と巡り来ることのない青春時代を、鉱山という特殊地帯で生きているのであった。
「股旅ものもよいが、ぼく、浪曲を一席、うなりたいな……」山内さんが母へ視線を送りながら、そういった。
「森の石松……?佐渡情話……?」勝子が茶化した。
「いいじゃない。切り狂言のまえに、一席もうけたら」喜代子は母の目を見つめていた。母は喜代子に気圧されて、こっくり肯いていた。芸には厳しいと僕は島本から聞いていたが、母には女としての優しい一面が感じられるのであった。喜代子の父は、坑内支線の終点の硬層を削岩機や鶴嘴で抉って行く掘進夫だった。いまごろは炭塵でむせる坑内で、穿った孔にダイナマイトを仕掛けているのかも知れない。僕はそう思った。
「それでさあ、カツラや刀はどうするの?」島本が訊ねた。
「カツラは、棕櫚の皮にエナメルを塗ればいいじゃない。刀は竹を削ぎ、厚紙の鍔をつけてさあ。銀箔を塗れば、できあがりよ」
「なるほど、ぼくらにふさわしい出立ちだな。わかるわかる」島本がすっ頓狂な声でそういったので、一同はどよめいたのだった。僕はそれから二ヶ月ほど演劇の練習に通い、クラブで上演したときには相当に熟達していて、画期的な成功をおさめることができ、観客の大喝采を受けて幕を閉じたのであった。とりもなおさず僕はこの鉱山が好きだった。
思い出に耽りながらダイナマイトのぎっしり詰まった木箱を担いで採鉱課へ戻ると、昼食のために切羽から戻った採鉱係員たちの姿があった。まだ正午には四十分ほどの時間があったが、課長はじめ、係員らは早起きするせいか、正午前に昼食する習慣がついていたのだった。
「ただいま、戻りました」僕がそういって奥の倉庫へ行こうとすると、
「ご苦労さん。それ下ろして、食事にしたら……」課長が飯を噛みながらそういった。

「はい……」僕は応えて、倉庫へ歩いた。三交代勤務の掘進夫や採炭夫などの鉱員は炭塵が舞い、熱気がむんむんする硬の上で、正午まえの早飯を食べていることであろうし、鉱山事務所勤務の職員や企画課に所属する大堀さんや山内さんなどは平常勤務だから、きちんと規則を守って、正午の食事だと僕は思った。炭塵の舞う硬の上で食事をする鉱員にくらべると、僕はずいぶん恵まれているなと思った。ダイナマイトのぎっしり詰まった木箱を倉庫に下ろした僕は、書記席の椅子に掛けて傍に置いていた飯盒をとり、蓋を開けた。採鉱係員たちは雑談しながら食事していた。課長は無言であった。係員たちの話題はもっぱら遊郭の娼婦のことだった。遊郭の娼婦がどうのこうのと、たわいない猥談だった。

――いけない、こんな話を聞いたら、向学心の妨げになる。僕はそう思いながら、母が炊いてくれた麦飯を口に運んだ。そのとき、轟音が坑内じゅうにとどろき、書記席の窓口をとおして目にする線路の上を火花を散らしながら、十二函の空炭車がものすごいスピードで暴走して下った。鉤を止める転結ピンがぬけたのか、棹取の藤山さんの姿はなく、巻堂を通じた巻上げ用ワイヤロープも目に映らなかった。

「む…なんだ、あれは！」一同は騒然として、すべての係員がカンテラを手に、採鉱課の詰所から躍び出して行った。僕も彼らの後につづこうと、鉱員帽を被ると、課長が手で制し、

「おまえとおれは、動いちゃならん」唇をふるわせながら、詰所の中ほどに佇んでいた。暴走空炭車を目にした僕は、詰所の天井を支えている丸太を両手でしっかり握り締めていた。初めて目にする空炭車の暴走事故に、僕は色を失っていたのだった。左三方払や右二方払などの支線のポイントを切換えないかぎり、空炭車は線路の終点めざして暴走するのである。終点では大堀さんらが測量をしている。正午にはまだ間があるので、作業をつづけているのではないかと僕は思った。

――大堀さん……山内さん……どうか無事であってほしい……僕は心で彼らが無事であることを祈りつづけた。しばらくして、傾斜道の上方から鉱員らのどよめく声がして、カンテラの光りが続々と僕の目の前を通り過ぎて行った。いったい、どうしたというのだろう。数珠つなぎに連結されている空炭車が暴走するとは……しばらくして、傾斜のつづく坑内の階段道を下りて行った採鉱係員の一人から、課長の机に据えてある坑内電話機に電話がかかってきた。

「やっぱり、うん、うん、わかった」課長はそう応えて電話を切り、つづいてダイヤルをまわしていた。僕は丸太にしがみついたままの状態で、課長の姿を見つめていた。課長は消防署へ電話をかけ、つづいて警察と病院へ電話をかけていることが読みとれた。消防署には救援隊出動の要請をしたのであろう。とすると、やはり人身事故が発生したのだろうか？僕の脳裏に大堀さんの、少年は希望をすてちゃいかんのだ……という言葉と、山内さんの、その意気で、がんばるんだぞ……という言葉が浮かんできた。やはり、彼らは空炭車の暴走事故に巻込まれたのであろうか。僕は胸の高鳴りをおさえ、どうにか書記席まで歩いて、そこに佇んだ。上方から傾斜道を鉱長の佐田さんと勤労課の係員数名が下りて来て課長に声をかけ、ふたたび線路の終点めざして下りて行った。課長が出動要請していた救援隊はまだ到着しないのか、下りて来る気配はなかった。次に下りて来たのは三番方から一番方へと連勤している棹取の島本と、坑外の棹取だった。暴走空炭車の担当者だった藤山さんはすでに下りているのであろうか。島本らは無言で僕に会釈しただけで通り過ぎて行ったのだった。課長は方々に電話をかけたり受けたりしていた。しばらくして、ヘルメットを被った救援隊が続々と下りて行き、一番方の鉱員が次々に退坑して上った。

「おまえ、帰ってもいいぞ……ここは、おれ一人でいいから、帰りなさい」課長が僕にそういった。

「はい……」僕はそう応えたが、退坑しようとしなかった。

「む……？帰らないのか」課長はそういって、ふたたび電話をかけていた。

「課長、じゃあ、失礼させていただきます」僕は怯える心を抑え、採鉱課の詰所を出た。僕は階段道を無我夢中で上り、坑口を出たのであったが……

それから二日間、鉱山側は事故処理のためにすべての鉱員に対して入坑禁止の措置をとった。僕は入坑禁止の措置が解かれた後、入坑時に島本から当時の線路の終点のもようをつぶさに聞くことができた。島本の話によると、線路の終点では、やはり大堀さんらが測量作業をしていて、山内さんがポールを持って硬層の前に突っ立ち、大堀さんがトランシットを覗いていたらしく、そこへ轟音をとどろかせながら空炭車が猛烈な勢いで暴走して突っ込んだ、ということだった。大堀さんは跳ねとばされて、坑道の横の硬壁に体をたたきつけられ、山内さんは十二函の空炭車に圧し潰されたのだという。傾斜の険しい本線の坑道に敷かれた線路であった。ブレーキ作用のない空炭車は距離とともに加速度を増し、終点へつっ込んだのであった。僕は想像を絶する思いで島本の話を聞いていた。でも、島本は事故原因については語ろうとしなかったので、僕もあえて聞かないことにした。棹取の藤山さんの人為的過失なのか、それともなんらかの作用による偶発的事故なのか、いずれにしても、もう、彼らの笑顔を目にすることはないのだ。僕は大堀さんと山内さんの冥福を祈った。葬儀にも参列しよう……そう思った。僕の心の奥にあるなにかが、音たてて崩れて行くような気がしてならなかった。おそらくはこの鉱山の優良鉱の指定は取消されることであろう。でも、そんなことよりも、僕にとっては二人の死による悲しみの方が大きかった。

僕の夢も希望も一瞬にして奪い去った坑内事故……もう、僕を優しく労わってくれる人々はこの鉱山にはいない。僕はそう思い、溢れてくる涙をそっと拭いた。

「大堀さ――ん……山内さ――ん……」僕は心の裡で叫んだ。大堀さんと山内さんが微笑んで、優しく手招いているような気がした。この事故は僕が坑内で口笛を吹いたために発生したように思えてならなかった。恐らくは口笛を注意してくれたあの鉱員もそう思っているのではないか、と僕には思えた。大堀さんと山内さんに対して、申し訳ないことをしたという反省の気持ちでいっぱいだった。

僕は坑内本線の終点へと繋がっている階段道を、カンテラを照らしながら一歩また一歩と下りて行った。この階段道は僕にとって明日への道のりであった。